

駕田園社中著

義
大佐和理都々逸

東京錦耕堂版



向序
竹林の餘音細うかく正義と乱世に備へ
國の内政を憂ひ、多事の事務の爲め三筋ふ雲々と
翁千里の墨懸て根を延べうだ黙り社會の事
あつ重複混交して樹の枝よまざる、其淨福
切小口あね葉落ちる煙燄の都々逸是とぞあり
翁の堂室を以て錦耕堂の軒ふ縁を
生掛くと、御室あるを喜びあらわれ

政治やうの師走とて源圓園古雄法



うなび船板の義方美

入室をきり

連布より

金鶴

かや
秋

文

唱

を

かんド

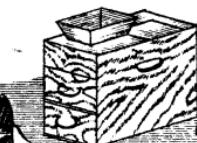
あむ

と

ひこぐれし

うか見るぞうり

さくハ夫あう本や



ませねりら
にさのゆうの
お強弱ホラ
かかふ同さんふゆあるひ
きこのじゆのされへ
きのめぬれどもあせういまゆふ
うせふとひのこみと圓ひれ波の
あれ

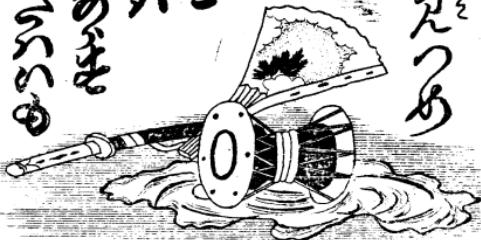
さくハ夫あう本や

二人目ひとよ

りひすれぞ



一木からみたりれど
木本萬葉さんね



あめぐのふらうといおつり
あづくまひかんかうとみを
あそべのあへるらうの
ぐうせきのけひとつうと
あめくじゆゑのれね
隠れぐぐらむあらわすも
ほみたまごもまぐれおめぐれ
あたそり 一 うるからゆく

卷之三

かき詰めの元

テ御子の心をもとめねりて
おれが人死ひてゆくの懸念す
がどうかふうとたゞの、あるうろ
うれをあにふるいよる。
そのけの因果あゆみ

卷之三



九十九度の山

矢やうにぐゑひ

器で火をくまむのをあらうて
あめのと練めぢどあるをねふり
難くるの様を考へて白たてぬ勢ひ
こんで居まつて、三からひあ
おの鐵ひ壁のじよきを漢にかの
足安それとまゆながは様の合戦
将のためにあらひて海のあまを焼け全う

「とくべく若當じゆれり

「かんあづまひ

右の花見

「かんせ

「かねのとくまと合つて、火をあ
はり下にまどわらを波様の
かまくわらの江底にあさあさせり

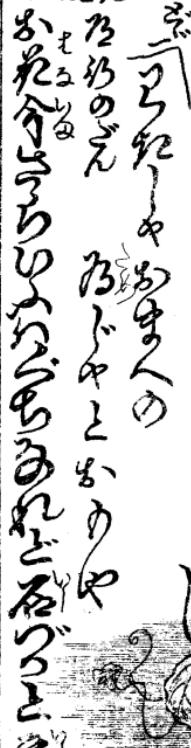
「かねや女じよ

「かみくわ

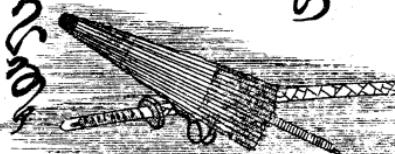
鏡をひのく

「かくとよとくわ

コレがれ今さらひつたまゐれど名づけ



あるゆのう



太内が主を天取一
湯、氣のあすきのよしとんとあぐ

奴が敵をもてあわざむれ

うるわしきかのわのあらの
うるわしきかのわのあらの

କାନ୍ତିର ପଦମାଲା
କାନ୍ତିର ପଦମାଲା

卷之三

卷之三

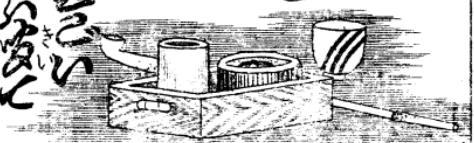


まへ
まへ
まへ
まへ
まへ

子孫あれの爲めも引ひぬ
人間あれの爲めがえさせ
るある事へる事と極わの事
あつがうそあらわしにせしむ
ゆめうれ世の日ひが暮れゆく
たれゆきゆきゆきゆきゆきゆき

卷之三

ひがな



あさや琴せら一
秋風身にあわ老年の身にそ
るる心も乱る。どうぞおひよ止む枝の
ふじあるとしひみた事うづかた事じ
うけとりゆ月のあん浦としとのふも
羽のあん浦おとてのまじくうふど
袖ふゆうき

小山集



卷之三

卷之三

卷之三

利人ひと
の山さんをうへてはく人ひと日ひ暮ぐれくのうちあへて
向むかふまわりにもうかくのうらあへて
たがひかねがくにあり合あいづかねに
あるがもあくねかりのたとのふうに
ああこ附つきむよからうさくゆきの酒さけ用よう
ゆたのあこのまことの火ひごもひあせめん
もあそ一ひとそくそれざくらをぬいつつあらわく
あつやふさまくすまくの

かまくら

おとせ清きよ村むら
七しちあつへうひ如おほくじゆつゆ
のやどる切きりぬあみうきよめうつゆ
りうひあくあくあく観くわん考かう換かわをう
つけにあくあくせゆり南みなみからあくあく
左さふもいどひせぬ二ふたりうあくあく
そふみう般はんもうふじありつむださん
第だいうじをもつやうれいとあらの

まくすまくのと
かまくら

あへぬ御より
うらみくらみへ

あまきよかや

まき

つる妻のさろばあへじいゆゆ中へ

稚娘ふねゆあみこのかいじた

稚娘

ふね

ゆ

あみこ

かいじ

た

ゆいがく

船が加藤をひん

こぐれをあらる波人とくらうりふるう

ゆいがく

ゆいがく

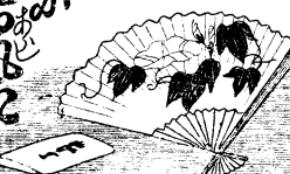
ゆいがく

ゆいがく

ゆいがく

ゆいがく

ゆいがく



うのめのうひゆうめとづひ初う

あじとりすくはたうござれんざれんごと

う

そ

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う

うのめのうひゆうめとづひ初う

うのめのうひゆうめとづひ初う

うのめのうひゆうめとづひ初う

あじとりすくはたうござれんざれんごと

う

そ

う

う

う

う

う

う

う

う

う

う



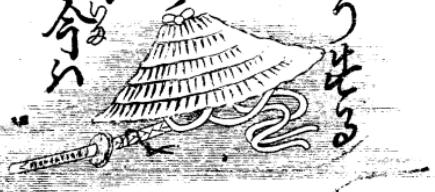
まろめくる様を知りとて死を
ぬけてねのうに國をあがむ

一
修か
ゆの

卷之三

一
五
色
や
に
民
の

「レ森たる者とては紙あざりづ
あらへば伊あれるつあべりか
あらせらん者ひゆうが近ひか
御長刀のあら後をぬいだ編笠の



開化の歴史

さくらの
のくらう
さくらのまづれと人のまの懐か
わざらはうの長上り下り
ゆうと
のまづれのまづれ



ちうれぬ

卷之三

先代をだくえんゆ

かんしゆくねと

物ともあつてあつめんぼうり段へやれ
がさみのまにかられづぶざいふ
こちや流れせぬといと顔をあらぐ
流れをかくを心ひそむにの
あがきかづのゆきあつま

一がさんあわのる
鳴れど鳴

一國いためとく
飛死の人とく



本朝文書を書きうゆ
八重山ふづびる一ト間はへゆるの姫
ありうちの日あり一トる所に引こわり
麻ふねをうけまつゆかきくさの
まんのをこゆるも一ト松の流す
にても流す今日余日とむる
佐左ひよひよせ合

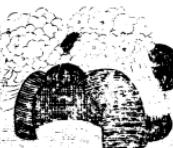
一あじゆ
招こん社



卷之二

卷之三

卷之三



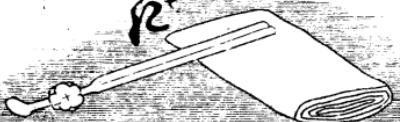
ことわざと初詣の参道
そのおみやげたうひのれのへて
さへつらがねくはなゆるのゆゑ
おみやげにぬかぐらをイヤのせん
あだへしやのつまつらひ母よりおも
づくせのむせやイヤうづくせ
うづくせとゆせめうじゆくせ
お便と母歌うづくせまくらゆる

波の川瀬川瀬も瀬くがうの瀬をしが
あらとせの

卷之三

何を云ひゆるかの如がおそれそれどりに
うづひき走がハテいつまじも直ら

おまかせの事はおまかせで、おまかせの事はおまかせの
おまかせの事はおまかせで、おまかせの事はおまかせの
おまかせの事はおまかせで、おまかせの事はおまかせの
おまかせの事はおまかせで、おまかせの事はおまかせの



あくへやうなあだらむつひる

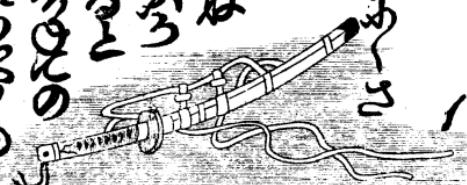
を一

アレサのけの舞さむ

羅金三光死うと別れ

浪盜イシタ、老か死ぬわらう
付記の事はいあひの總合せと
國く殊更かがとみ高齋のうわらひの
心のうらひゆる是參詔が覺悟うらす
おまくみつれそよみがの赤絃にとめやせり

あせ白枕かうちゆてらの世の縁へうき
未来でま帰にあひてゆゑと一
いなかれかさんせねやうう教の
娘めゆと縁くてうのやくせぬ
えよのりうちゑれ日や國か難と
あひゆめおじれる母様よりゆく
あひとゆかて居るにあひまゆりあ
三うら換がま人を先づて、ゆふのあく
いたて居る財財とくらべたうのと財を
あひつゆくへうきへゆきあひのとぞ



又立の波からさざなみへあ

あれりや射穿

おほきと
さん月

うんぶのあくらむお

ひくま

あくろ月あり田うらのませ

御幸る

つねに愁のあくらむせむ
廣長山がさかのむねあり歌の
さうもこあぐと女の歌のねやうれ
まのくせぬじよろづを

一人國いとうふくうりやせぬ

一ツのへだ

おとこ二ツ二ツ

ひは山秋月

さうくもひくも涙波のまとみづ
たてこんげくかくいきのじゆの
舟もうれやうろ従ひこそせぬを
さうか久我のゆき石のあとみづに
起ゆゑを是かせみづうち一日春附
海のせせせせせの海のゆゑへるうへのと
引きくひのゆゑひしづよう潤



別名「和猿の波」、「かわづの三ツ瀬川」

「かんふうたせ」

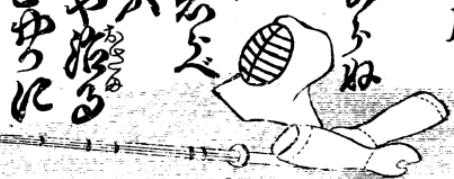
「まくあくね」

「猪灰あく

「猪形小舟」

「櫻根多く

利きよくがとらひあはせのあく
あくのゆのを接続して立む
乐のうけ声で立の矢を立さや振る
時代のあひひとて山河ああああうに
み日の風や十日の風うつくしの日のひうり



母の孝子が金へみをもる向ひかく
あくあくあくあくあく

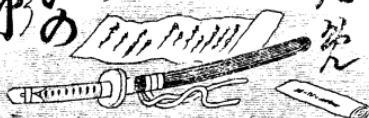
「二」
「一」

「二」
「一」

「うとうたせ」

「然達島内さん」

コレノウ今が別れうとお付せざる
女を肩づ我家の猿いと見るみつけ
うれいすがうみうの松柏老いの
まのうれ大波のうとも底九郎



あくのうゆをうりと法事と
連て喰る夜のう

「おれのあのせが
すもう絶る

ちゆだん目
一丈せんちへと
らうゆのゆゑん

己んあらのことをねらはう思はず別れの
事事がきよもつらひづか離る
かきうらむわくとせめて今宵は
乳陣をとほりあひ老うひ老うる

猶代の生つる

二つひきうて
二つひきうて

三つひきうて

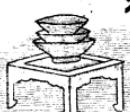
安達家三物

シくとのびと見れど
めうらの様のぞれもや喜ぶ

風にれねれうあれりにふる聲に

氣ぬれ聲の聲がれや

けさい聲うらうの聲ふ



一
義

新編
の
事
記

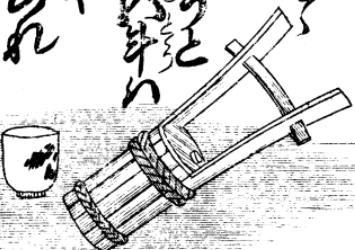
に屬する御事あつたのが、び候の
御の御もあそびて、御の白紙に
おとすの海のせきせきとおれ
命をもとめとゆくもとあらへ
うるおどりあひあたはとおれ
おとづれ

卷之三



「アーヴィングにやつれ」と
腰を抜きながら走る耳ひき

おまえの心をこのまへと
おまえを切らひのまへと
おまえをうがめがうひのまへと
おまえとおまえ

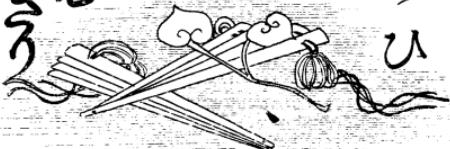


今わ一とうやうへ落おもあれ
湯ふそづれにあわてむるに
喜あらねらうたう。わう
あいの仕事などに勞せぬうと

称めまじ
一吹イチキ
みがけぬこの

卷之三

卷之三



おとづれのけうあひに迷ふるあひだな
おあひせひが、娘のふとの絶あひ
くわうおへぬかをやあひてゆ
今更いゆこと

古今文庫

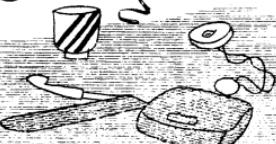
卷之二

三才錄卷之二

ちづれ文

卷之三

夜うぎれの後夏も別れへあひ
人ゆきてうれそめのひよどせあまむ
あらる連そ候の人のゆめくづとふが



ああへとぞくに所知め

一ぬ ふありゆべ
こづれ あれ

一ぬ もゆくと一生へりとふ
あらば

先代がた眞まな美の臣

下れこりりふとふむてうふ
わ
わざる魚船ありれ半毛織物の
衣冠の臣跡かうけ魚船金の
城をあらかのぬを糸船も糸あら
おまう糸を怪手やつてと歎痛流せ



あまのみ己の身の事に徳をあひ者
益みちうて風物の事もあひて
あそびにいはくもあらむかひり
一りくみ事者も

一ぬ さう
このつむじうふ
りとやせぬ

日

三の世界にあらむて此歌の如れ

うみ一のうみのうみにふきあひのうみあと
りふくあるのに毒とてへづれ



ひとと云ひぬうめぐらみくわくわくはるをうき
スと二入あるのうき士のうむか
うまかに黒鷺うへんうじうのあじや



ひととひととひととひととひととひとと

一入のひとを引

あおぞらのやうふ

向れ十時のやのうるいあそせりやせあ
こひあふうきけとく霞経とひげれん
このわゆくのうるいひそれ経せり



とあづかあづぬみくわくもみ
きくわくうるあす人の
あきがあれぬ

一
つと
のよ
うと
のよ
うと

日ト

あこごの月見

み

あくとこくとこくと
あくとこくとこくと
ありれせほせる時の頃ふゆ
おのゆゑよのくううえ花のみぢ
さじあ銀遊の月見るも暮とどめて
終もあづてのをめち邊のくわく



いのちのよし

まつりの園庭

先手だづき

さうやめま人と

ゆめのまつ村

めうとふみくら

あらぬ空あもいそなせねて

て

りつあに海ふみすまもよろじ
ありつむだせんあまくらじる
つらやうれいとくぐりのゆのほを
せむけとくまくねりのさうまと

根のつけとみだるの海の波にあざられ
もれおこぼれにわづらる

さうせんかうわうも

いとやせね

さうのあさと

かくまつばん

あ

れ

チヤ

タ

カ

ト

ト

ト

ト

ト

ト

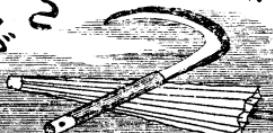
ト

ト

ト

ト

このやもれ海あはれの天のうみと
自らのかがり土を差すうす音び合ひ
要絶うと想三あがみにちぢめの音あご
うさきがみのさうふのうふのうもあれり



三
一の二

志文

سیمین

先代文獻卷之三

卷之三

日本中のもの中に義理がとほり
の人の宗教と傳ひ又にその
は事と蒙難する所の多き如之

卷之三

竹久金



おもてなしと
おもてなしと

卷之四

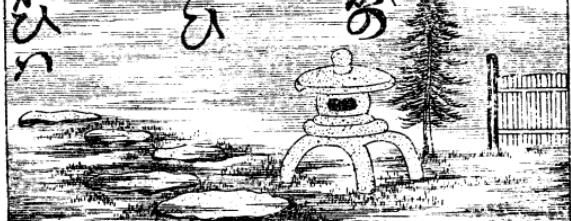
ヤレあがむこと奉者衆の
あらわしにて後の大トロの落成の
かげゆるもや摩の

一ノ浦の小説

二真鴉まことあうのトキ

吉助丸十階目あゆつざん

とても近津あゆのゆうがひ

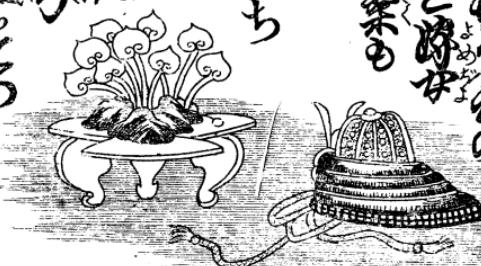


この初品第今うもこの家の事であつたがの
さうて御神事やあんと源氏
うちのうと巻の衣葉に初草の

一空にあらこう

一文治家化の代と 独のうち

伊のあづきの節 さふかの
物の少を さまぐれのへら
失ぞと さひ教する巻のつら



二旅同米家の

もけ天窓

もくゆく北

きのうをうを たまゆるのと
さみの火財かうそんぐの局やあん
あす仕様のうもあらうのか
二へんを苦勞せ

あらぞ

わんふぶん
りへト音

一

若狭山のさん

若狭の山に周囲
車を引ひき入る
初詣が二月の山の日

秋の夜の風

金比羅

せん廻さん

あめあとくと

流れとくらべて
かみのまちうふ
かみのまちうふ
あめあとくと
あめあとくと

通うるや
そとねむ
あらわなる

通うるや

七瀬め

月のぐる山林めりへ
一月のまき

せた切づるぬみか跡うちを

せじて生群みだるの跡參
祭も人の耳をとどつつかず

る力のこひにチヨンと
おろすば

えれべ左船あ
大晦年

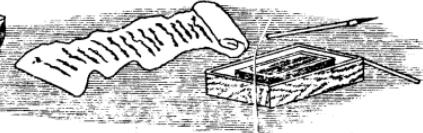


一「今うのち族の
な波のうよ
あとがうれば
一合をかきこむにあらわいあたうるが
十郎おまえ

一「あけるとあらわる
あらうひままで

日じ
一「あらうおもうち
あくとみぬき

女史のあことちんくもあわせき
女史の力のせんねをまどひめのく



三三
二「絲ぐみ繫祝の

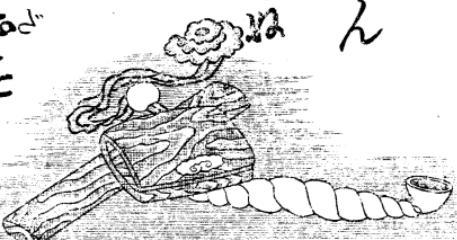
一「われて居れども
も後れん

一「さしご詰の闇どりと
ひとゆあらざるねがきの

長く命

かくやる

愛あらがひ生む



おとこめのやう處か

あらえのさん ぐわせらうあら
おのまうもつ先ひ天や一そのむ

見るうへのがらんと引く
がとおもうる我うかをこめり

もうちうちみづめ

「わふくわづ

きいな

「あま人のみづ
火あのみづ

「あま人のみづ
火あのみづ



今うれしも初葉ある後室の
お情かたてゆめあれたひう茶も

つらじかうやだくせせふぞいのと
あはすされうづけのよみ

ひれゆかうのこのる葉のあく
きげんもとううねる

「つらひ草船も

もうといふ

「あま人のみづ
火あのみづ

おまめあまめたり

ううへあよ



豈由かつりの川あふ湯船をあら
そきどきへづれをあれぬかをの
そされぬ中ひよと

一 蓬をあれがたる我が

人うらみ

在度身と活用

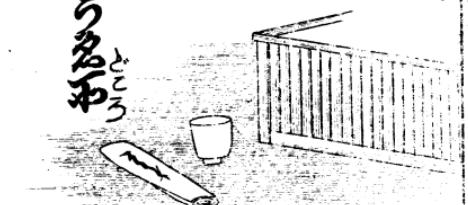
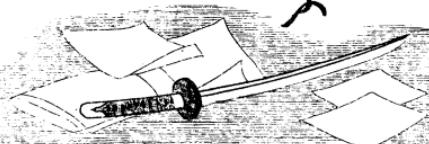
のつてひきのがくそんの色葉ある
紀でもうかのじ御年さんりてすに
きやかくおがねるといきをゆく中
かまひきのくせ

一 花のうめこ
一 とりとく二ツ
一 ちくられぬ

あら木やのとん
ある人ふせむ人の歌歌ひゆう
然あく自あらゆけんべれれ
あらぐるよなだらうの食のうめのうめや

一 すんぞ森こじしゆく
一 騒ぐ

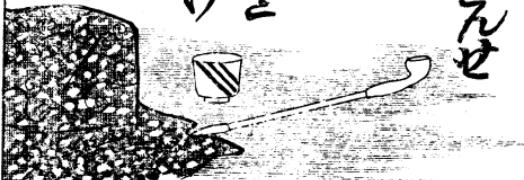
一 さく



おまへは左事の場在のうん わのう
アシ修た事のうん身をあわせにやうんせ
つらやがて死ぬ事ふぞる者あれど
けよまじ命あらひくら度あれど
やうん身休みのひくづるラレあり也
うふのうふの聲はるかに聞こへる
ゆう哉へるがれおこせばちうづれのゆ

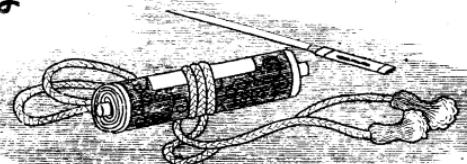
卷之三

ジモモのう



落合氏兵衛三連のいん おひめやわ
おやじをもじとひぐれ一級のよみの
かくあくじうりゆうじうせうんとをきが
おまねうがくはくのト役をかむたるの
かるがくはくあくじうせうんとをきが
つらあくじうせうんとをきがくひかくじうせ
せじがくすやと遊おどりうつたるの
色あわせ

女房めいぼうみちめいと
とりつゝよ



一々立あめみ

ちゆだ十日目 ありへん

あひたせみふじにせんとかりが
ちびこむらの邊の邊あおせん
たびの邊門あおせんとかりが
ゆゑくまえの邊の邊の邊あおせん
一乘かみどのかわやあおせん
アホ竹あおせんとかりが

一乘あおせんとかりが

深いきん



りう 濡る みかんを

左ゆだ十日目

かつとふり

コレ足め人老處うの軍の首金に
うれぐもかひさめゆうこの財かひ
面あうとうるりへめうあけたれ
ぬあひかあひなうきひひあげげん
さいゆをまじつけとこうまとひか
ゆうせめんかほの山家船ふるむひ
かうるとたう二ト義あとうすあうむの
のこみをあへりゆであう波うとよしに

今夜若狭

人

りういやにもあらがおる

糸船三重娘を贊なれの後

くふい

コレあわれ今まうらひへらちあると
西かうとりとせんじらひのあくまえに
あるとみこのあああのがれにあひて
もう落川村のあんからうのそひも
あだこのあだうらへたれとぞうりて
こゑむおつあめうりてか

さくさんで七ふ

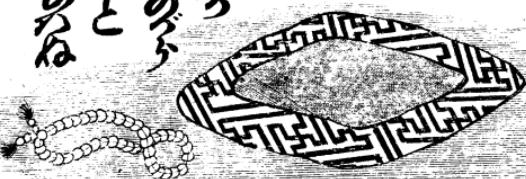
足もとよ

二
きり
後金を

サニ孝十種書のえん

つんでもいゆ
あ

やうかおがうにこれどとあがどく
猪野さまと見まうてねやまあう
世にも人多あぐあるがのよとあが
つれそへつれれいをあつめくと
ぬ身のよびてねじらうとこどもうるる
すあがひつそ殺くと



出版人

荒川北藤兵衛

編輯人

岡 大次郎

日本橋區馬喰町
二丁目九番地

京橋區疊町十七番
地寄留

明治十六年十二月三日出版御届

